

## 徳島公園（徳島中央公園）の造園設計について － 日比谷公園及びザイファースドルフ城との比較 －

佐藤 征弥\*・安田 侑右\*\*・的場 一将\*\*・前高 明典\*\*・包 斯琴高娃\*\*・平島 佑香\*\*・  
中島 明日香\*\*・坂田 真宏\*\*・黒地 潤\*\*・韓 哲浩\*\*・遠藤 陽介\*\*・境 泉洋\*・宮崎 隆義\*

\*徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1  
E-mail: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp

\*\*徳島大学大学院総合科学教育部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

## Landscape Architecture of Tokushima Central Park － Comparison with Hibiya Park and Seifersdorf Castle －

Masaya Satoh\*, Yusuke Yasuda\*\*, Kazumasa Matoba\*\*, Akinori Maetaka\*\*, Siqingaowa Bao\*\*,  
Yuka Hirashima\*\*, Asuka Nakajima\*\*, Masahiro Sakata\*\*, Jun Kurochi\*\*, Zhehao Han\*\*,  
Yousuke Endo\*\*, Motohiro Sakai\*, Takayoshi Miyazaki\*

\*Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Tokushima 770-8502, Japan.

\*\*Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Tokushima 770-8502, Japan.

### Abstract

Tokushima Park (originally named Tokushima Central Park) is the Japan's second western-style park that was opened in 1906. We investigated landscape architecture of Tokushima Park based on a blueprint made in 1905 to understand its purpose and function of the park, and compared with Hibiya Park that is the Japan's first western-style park. Tokushima Park consisted of five areas. The central area included Mt. Shiroyama (Castle Mountain), and primeval forest was protected without allowing to make a big building within the area. A commercial museum, an athletic field, and a botanical garden and a library were placed in the southern, western and eastern areas respectively, so that each area was designed to exhibit each function.

Tokushima Park and Hibiya Park were designed by the same two persons Seiroku Honda and Takanori Hongo. The two parks were equipped with a wide road, an athletic field, a botanical garden and so on, and these facilities were adopted to the park made since them.

Because Seiroku Honda adopted three design drawings of German parks from the book *Gärtnerisches Planzeichnen* into a blueprint of Hibiya Park, we investigated the book to ascertain whether any design drawing was also used in Tokushima Park. We found that Seifersdorf Castle, the castle of count Brühl that was built at Seifersdorf in Germany in 13<sup>th</sup> century, is similar to the southern area of Tokushima Park.

**Key words:** “Gärtnerisches Planzeichnen”, Hibiya Park, landscape architecture, Max Bertram, Seifersdorf Castle, Seiroku Honda, Tokushima Central Park, Tokushima Park

## はじめに

明治6年（1873）の太政官布告により「公園」設置が法的に宣言されてから100年を機に刊行された『日本の公園』（田中1974）以降、公園史に関する研究が確立されてきた（丸山1997）。日本の公園史において、東京都千代田区の日比谷公園は、日本で最初に作られた西洋風近代公園として重要な位置を占め、公園設立に至るまでの経緯や設立後の変遷、公園の機能や利用意識の変化など歴史やその価値について多様な観点から調査分析した資料が豊富にある（田中1974、前島1980、熊谷ら1995、白幡1995、丸山1997、武居ら1998、山口2004、進士2011）。

徳島中央公園<sup>1)</sup>は明治39年（1906）に旧徳島藩主蜂須賀公の居城跡に「徳島公園」として開設されて以来、市の中心部に位置する総合公園として多くの人々に利用され親しまれてきた。城址公園である点や桃山時代から続く日本庭園である旧表御殿庭園を有することで、地元以外の人にもその名を知られているものの、日比谷公園に続いて我が国で二番目に作られた西洋風近代公園であることはあまり知られていない。学問的にも徳島公園が近代公園の中でどのように位置づけられるかという公園史の観点から扱われることはなかった。また、徳島公園の設立の経緯について、文章による記録は残っているものの設計の詳細に踏込んだ研究は行われてこなかったが、それは設立前後の公園の設計図や図面が残っていないことによる。我々は、大学院のプロジェクト研究のなかで、徳島公園の歴史について調べていくうちに、明治38年（1905）に新聞紙上に徳島公園の設計図が発表されたことを知り、それに基づいて徳島公園設計の意図や理念を探ることを試みた。その際、比較の対象としたのが日比谷公園である。日比谷公園と徳島公園は我が国で最初と二番目に作られた西洋風近代公園であるだけでなく、設計を担当したのが東京帝国大学農科大学教授本多静六とその弟子本郷高德であるという点で共通している。日比谷公園については、先に述べたように豊富な資料が残っており、さらに設計者である本多自身がどのような意図で公園を設計したか記しているため、徳島公園の設計について考察する際の参考となる。

また、本研究ではドイツの公園の設計図集である“Gärtnerisches Planzeichnen”（『造園設計図案』<sup>2)</sup>）

についても調べた<sup>3)</sup>。この本は、本多が日比谷公園を設計するにあたって大いに参考にし、実際に日比谷公園の設計にこの本の図が取り入れられている。そこで、『造園設計図案』に徳島公園のモチーフとなった図が存在するかどうか調査した。

## 1. 徳島公園の歴史と設計

### 1-1. 公園設立前史

徳島藩蜂須賀家の居城であった徳島城は、明治5年（1872）に陸軍省の管轄となり、明治8年（1875）に解体され、鷲の門のほかの建物は姿を消した（河野1980、1982）。跡地は蜂須賀家が買い取って管理することになった。明治38年（1905）5月、徳島県知事床次竹次郎は、内相歓迎会の席上で日露戦争戦勝記念事業の一環として城址を公園化することを提案した<sup>4)</sup>。この事業は、城址の公園化以外に、大滝山の招魂碑を城山に移すこと、そして図書館・武器陳列場・商品陳列場を建設することから成る。図書館・武器陳列場・商品陳列場は、当初は場所が決まっていなかったが、新公園内に造られることになった<sup>5)</sup>。公園の設置は同年6月19日の徳島市会において決定された。

明治38年（1905）9月に城址を蜂須賀家から徳島市に売却する売買契約が交わされた。売買契約書<sup>6)</sup>を見ると、契約書の冒頭に阿波国徳島藩最後の藩主であり当時公爵議員であった蜂須賀茂韶が「徳島市公園地トシテ」徳島市に売却することが明記されている。なお、この契約書には、建物として唯一残っていた鷲の門について「門（鷲ノ門）ハ永久保存スベキモノトス」と記されているが、昭和20年（1945）7月に米軍の空襲により焼失した<sup>7)</sup>。

公園の設置決定後、床次知事はその造園設計を日比谷公園の設計を担当した本多静六に依頼した。明治38年（1905）8月に弟子の本郷高德が調査に訪れた後、11月には本多も訪れ、本多により造園設計のあらましが報告された<sup>8)</sup>。

そして売買手続きが完了してまもなくの明治39年（1906）1月9日、徳島公園が開設した。しかし、実際に造園工事が始まったのはその翌月である（上田1924）。

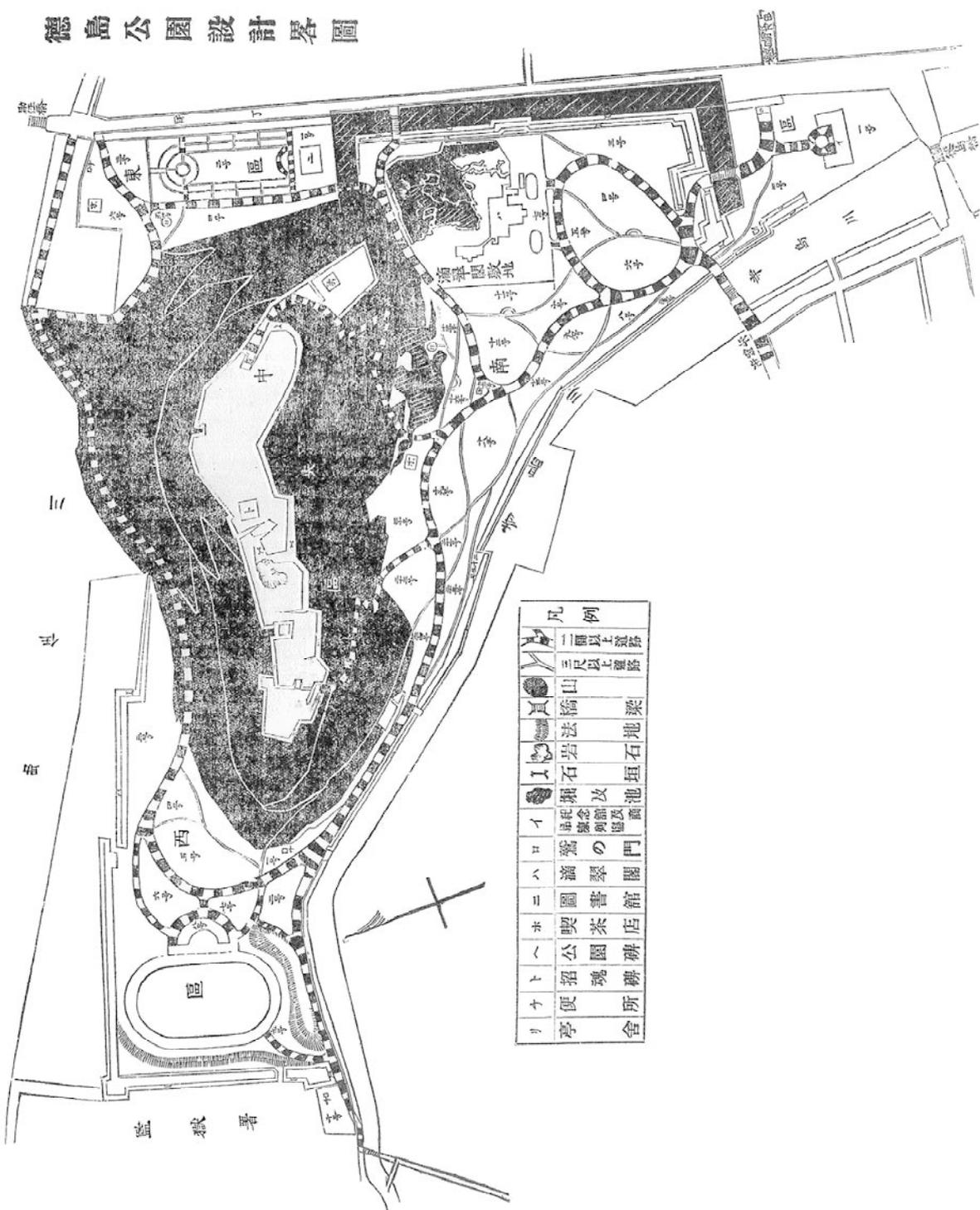


図1 明治38年(1905)の新聞に掲載された徳島公園の設計図

本図は明治38年(1905)12月5日に徳島毎日新聞に掲載された「徳島公園設計畧圖」である。図の左下にある「凡例」を記しておく、右から「二間以上道路」「三尺以上道路」「山」「橋梁」「法地」「岩石」「石垣」「堀及池」「イ 紀念館及商品陳列館」「ロ 鷺の門」「ハ 滴翠閣」「ニ 圖書館」「ホ 喫茶店」「ヘ 公園碑」「ト 招魂碑」「チ 便所」「リ 亭舎」である。図では分かりにくい、黒塗りが「山」、黒塗りに白の斜線が入っているのが「堀及池」である。

## 1-2. 徳島公園の設計図について

図1は明治38年（1905）12月5日に徳島毎日新聞に発表された「徳島公園設計畧圖」である。徳島公園はほぼ三角形をしており、城山全体が「中央区」、三角形の角にあたる部分が「東区」「西区」「南区」、そして設計前に既に在った「滴翠閣敷地」の計5つの区域に分けられている。東区には花壇のように整然と区画された植物園と、そのすぐ南に図書館（図中で「ニ」で示されている）が配置されている。西区には運動場が、南区の南端には「記念館<sup>9)</sup>」及商品陳列場（イ）が配置されている。このように三角形の各頂点には、それぞれ利用目的が異なる施設が置かれており、区域毎の特徴がはっきり表れている。園内の道は、幅二間（約3.6 m）以上の太い道路（図では鉄道の線路のような白黒の縞模様で示されている）と幅三尺（約90 cm）以上の細い道の2タイプに区別されている。城山は黒塗りで示され、公園東側にある堀と、滴翠閣敷地の西に位置する弁天池が、黒塗りに白の斜線で示されている。建造物は上記の他に喫茶店（ホ）が3箇所、城山中腹にある東二の丸跡と東区の植物園の北側と弁天池の西に置かれている。公園碑（ヘ）は弁天池の南、二間以上道路が三方から交わる所に置かれている。便所（チ）は、東区と西区と南区に1箇所ずつ設けられている。亭舎（リ）が弁天池の畔と植物園の脇に設けられているが、これは池や植物園の眺めをゆっくり楽しむための屋根付きの休憩所であろう。城山の山頂には設立趣意書の通り「招魂碑」（ト）が置かれている。この碑は、もともと眉山の神武天皇銅像の所に建立されたものを、徳島公園が作られた際に城山山頂に移された。

林学者であった本多は城山の自然を残すことが大切だと考え、本丸跡の招魂碑と上記東二の丸跡の喫茶店の他に建築物は設けなかった。明治38年（1905）11月7日の徳島毎日新聞に、本多自身が語った設計の主旨が載っているが、それによると城山の森林は「斧斤の入らざる天然林として甚貴重すべきものなれば林木の伐採は道路の開鑿及び眺望を得るための他は之を避け」とある。

他の区域についても、本多がどのような意図をもって設計したか分かる部分を紹介すると、南区については寺島川に剣先橋を架け、市街地と接続させて人の往来を盛んにすること、そして区内は芝生地と

し、園路交叉点や岐点には主としてツツジ、クリシマ、ツバキ等を散植し、見通しが良く散策に適した場所とすることとしている。また、記念館・商品陳列館は市街地との往来が便利なように南端に配置した。

東区については、遊園には適さないので図書館と植物園を配置したこと、そして植物園には各種の樹木を風致を損なわない限り混植し、一般人ことに学生・児童が植物に関する知識を得られるようにする、としている。

西区については、ここを全部運動場に充て、運動会の開催や民衆の集合地として利用することとしている。

滴翠閣敷地については、現時点では手を加えないが、滴翠閣が改築を迎える際には、公会堂兼迎賓館として使用出来るようにすることを提言している。次節で述べるように、その時期はすぐにおとずれた。また、敷地内の旧表御殿庭園については、庭園全部を現形のまま保存し、永久に改めないことを提言している。

## 1-3. 造園

実際の公園はこの設計図通りに完成したわけではなく、また主な施設が完成するまでかなりの時間を要した。商品陳列場は、「物産陳列場」として現在市立文化センターがある場所に明治40年（1907）10月に建設された。滴翠閣敷地の部分は大きな変更があった。ここは藩政時代に表御殿があった所で、滴翠閣は公会堂兼武術講習所として建設された。しかし、皇太子殿下の行啓が決定し、宿泊施設として千秋閣を新たに造ることになり、その場所が滴翠閣の地に決まったために滴翠閣は公園の東区に移された<sup>10)</sup>。千秋閣は、明治40年（1907）12月に完成し、翌年4月の皇太子行啓の宿泊に使われた。図2aに明治42年（1909）の地図を示す<sup>11)</sup>。千秋閣、記念館、鷺御門（鷺の門）、城山山頂の記念碑（招魂碑）が地図に示されている。西区は手つかずの状態であり、東区も移転した滴翠閣と思われる建物がみられるが、それ以外は整備が行われていない。

設立趣意書にも書かれた図書館も計画が変更された。滴翠閣が東区に移転したことにより、東区に建設予定であった図書館の計画はいったん消えた。しかし、大正天皇即位の大典を記念して大正2年

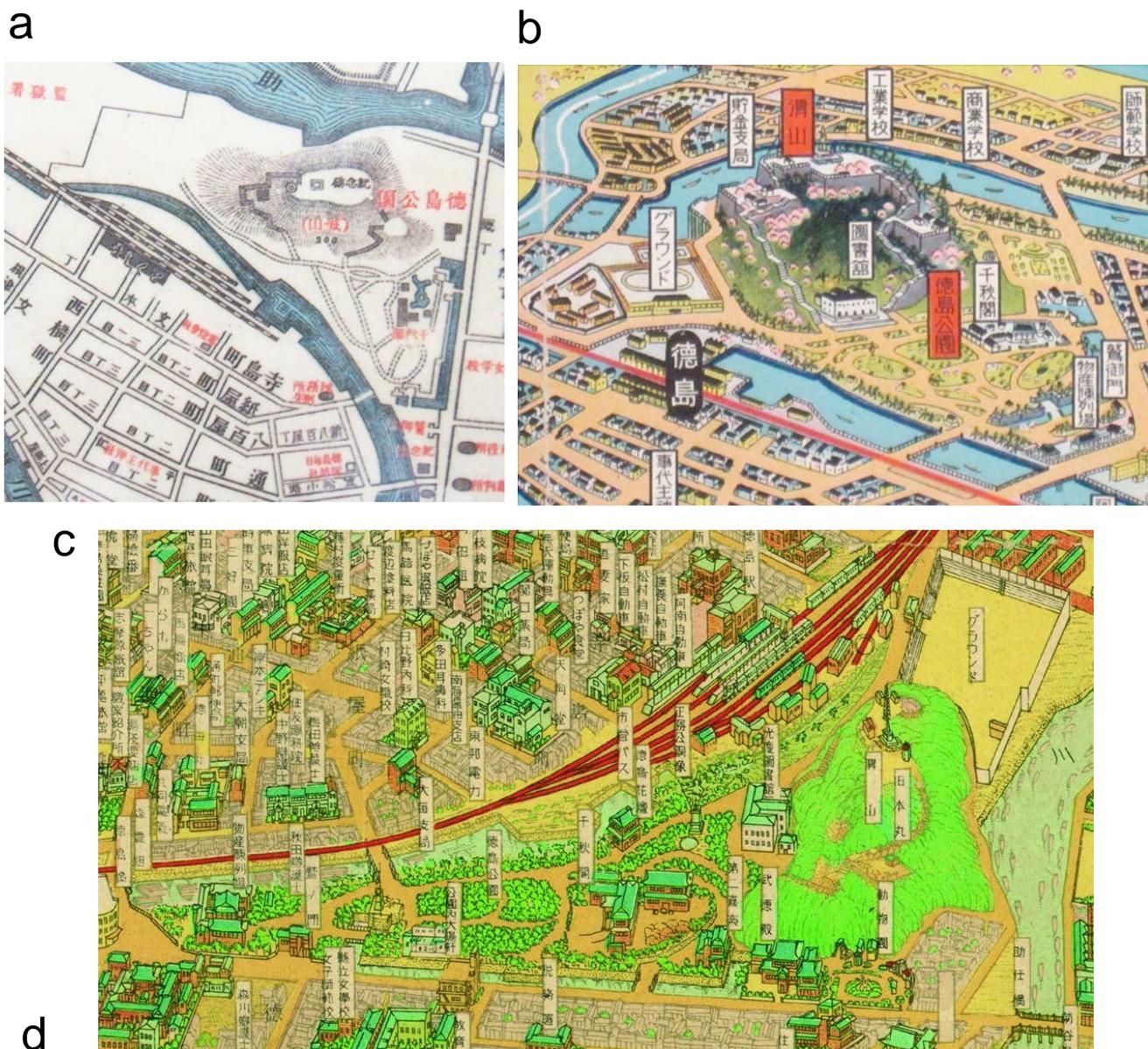


図2 昭和20年(1945)までの徳島公園の変遷

a: 明治42年(1909)に作成された徳島實業協会が発行した地図「徳島市街及附近名勝」、b: 昭和6年(1931)の吉田初三郎による鳥瞰図、c: 昭和12年(1937)徳島日日新報社から発行された鳥瞰図『大徳島市勢大観』、d: 昭和20年(1945)7月5日に米軍が撮影した撮徳島市街地航空写真。a、b、dは図の上方向がほぼ北を示しているが、cのみ図の右方向が北を示す。a、c、dは徳島県立文書館所蔵、bは四国大学附属図書館凌霄文庫所蔵の資料。

(1913) 12月に県会において設立が提案され翌年に設立が決定し、大正6年(1917)6月に「光慶図書館」として開館した<sup>12)</sup>。また、同年に藩祖蜂須賀正勝公の銅像が同公二百八十年祭典に際して東区に建立された(上田1924)。

設計図では東区に植物園が描かれているが、植物園が開設されたのは昭和3年(1928)になってからである。また、設計図では西区に運動場としてトラックが描かれているが、西区は広場として開放されスポーツ行事や様々なイベントがここで開催されていたものの、実際に運動場として整備されたのは昭和4年(1929)に昭和天皇即位を記念して「西の丸運動場」が陸上競技場兼野球場として作られた時である。昭和6年の鳥瞰図(吉田1931)には西の丸運動場が描かれており、東区の植物園もできあがっていることが分かる(図2b)。昭和初期の徳島公園を紹介した冊子には、東区について「花園には動物園あり禽鳥園あり、子供の國として遊戯場が開放せられた」と記され、さらに「数年前まで寂寥の場所が、急にあかるくなった感じがされる。とりわけ花園にはそれぞれ園丁が丹精の花、錦繡にうはしく咲いで、行楽の葉となつてゐる。」と華やかになった印象が記されている(小川1930)。昭和12年(1937)の鳥瞰図『大徳島市勢大観』<sup>13)</sup>にもそれらが描かれている(図2c)。

昭和20年(1945)の航空写真<sup>14)</sup>をみると、整備の早かった城山の南側の道路は明治38年の設計図とほぼ同様に作られていることが分かる(図2d)。しかし、東区では植物園の形状がやや異なっており、西区では運動場のトラックの向きが異なっているだけでなく道の形状についても当初の設計図とまったく異なっている。

#### 1-4. 空襲による焼失と復興

図2dの航空写真は昭和20年(1945)7月5日、徳島大空襲の翌日に米軍が撮影したものである。公園内の施設は全て灰燼に帰し、建物のあった所はその跡だけが残っている。その後の復旧について主な施設のみ記しておく、昭和32年(1957)に旧徳島城表御殿庭園が復旧し、昭和44年(1969)に千秋閣が再建された。平成4年(1992)には同所に徳島市立徳島城博物館が開館した。平成元年(1989)

には鷲の門が復元された。西の丸運動場の地は、現在は内町小学校となっている。

## 2. 徳島公園と日比谷公園との比較

### 2-1. 日比谷公園の設立経緯と設計

日比谷公園の設立に至るまでの経緯を簡単に記しておく、日比谷公園の土地は江戸時代には武家屋敷であったが、明治に入ってから陸軍の日比谷練兵場となった(田中1974)。練兵場が青山に移り、跡地を公園とすることが提案されたのは、明治21年(1888年)11月の東京市区改正委員会においてであり、翌年に承認・告示された(山口2004)。しかしその後、公園設計案の作成は難航し、いくつもの案が提出されたが、なかなか東京市会の承認を得ることができなかった。本多静六が公園設計を委嘱されることになったのは、明治33年(1900)秋に設計を委嘱された一人である辰野金吾を訪ねた際、本多が留学先のドイツから公園設計に関する本を持ち帰っていたことを知った辰野に勧められたことによる。本多はドレスデンの造園家マックス・ベルトラムがまとめたドイツの公園の設計図集『造園設計図案』を参考にして設計案を作成した。彼が日本庭園の専門家である小沢圭次郎に設計を依頼した日本庭園部分以外については、明治34年(1901)に市会を通過し、同年着工に入り、明治36年(1903)6月1日に開園した。

図3は明治40年(1907)の日比谷公園内地図である(東京市市史編纂係1907)。設計について、「日比谷公園の成立ち」(山口2004)と『庭園史をあるく-日本・ヨーロッパ編』(武居ら1998)から概略を記すと、園内は大別して南東、南西、北東、北西の四部に区画され、馬車用の幅広い曲線の道路で分けられている。そしてやはり曲線を多用した歩行者用の道路が園内に張り巡らされている。南東部は運動場があり、『造園設計図案』から西プロシャ(ドイツ)コーニッツ市営公園運動場の意匠に倣って競争路が設けられた。また、この区域には日本で初めてとなる野外音楽堂(音楽台)が設けられた(現在小音楽堂となっている箇所)。南西部の樹林地帯は、中央に小さい丘が設けられ、周囲はツツジ園とされた。西側の樹林地帯は『造園設計図案』中の北ドイツのベンゼン市立病院遊園に倣った。また、雲形池

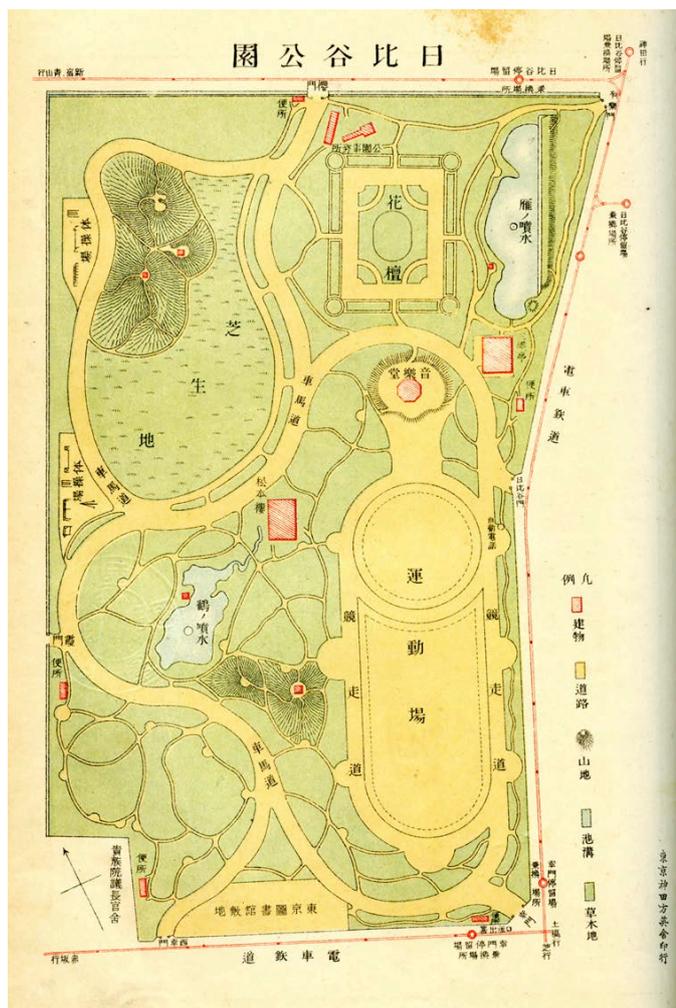


図3 明治40年(1907)の日比谷公園内地図

を設けたが、これも『造園設計図案』の図に倣った。北西部は日本庭園予定地とし、残土を盛って小さい丘を築き、平地は芝生地とした。北東部の有楽門近くには旧江戸城の石垣土塁はそのまま残され、その内側には心字池が作られ噴水が設けられた。

このように日比谷公園は日本初の西洋風近代公園として、日本庭園では考えられない大道路が敷設され、運動場、花壇、噴水、音楽堂といった多目的な施設・設備を備えた非常に斬新なものであった。しかし一方で日本庭園を設けて、完全に西洋風にはしなかった。

では、この新しい公園の評判はどうだったのだろうか。『近代都市公園史の研究-欧化の系譜-』(白幡1995)に日比谷公園の評判に関する資料が紹介さ

れている。それによると、開園翌日の新聞には「在来神社仏閣の境内を借りて足りいとせし東京市民も茲に初めて純粹の新公園を得て」と歓迎する記事が載った。また、開園から1年半経った頃の東京大学医学部教師ベルツの日記には「今ではあらゆる公の祝賀行事の中心だが」「大きい遊戯場、運動場があり、これは何人にも解放されていて、絶えず利用されており、月明かりの折りできえ塞がっている」と書かれており、大いに利用されていたことが伺われる。

## 2-2. 設計図の比較

上記のように日比谷公園が人々で賑わい、様々なイベントに利用され、新しい公園として注目されていることを知って、床次知事は本多に徳島公園の設計を依頼したに違いない。そして設計をまかされた本多および彼の弟子の本郷も、日比谷公園において好評価を得た点について徳島公園にも取り入れようと考えたことだろう。しかし、日比谷公園と徳島公園は一見すると類似点よりも相違点が際立っている。先に相違点について挙げると、まず、立地が異なる。日比谷公園は前身が練兵場であり、北東部に石垣土塁が残るだけでほぼ何もない状態から設計することができた。ただ平坦な土地があるだけであり、丘や池は工事で新たに築かれた。一方、徳島公園の場合は城趾であり、石垣が多く残っており、藩政時代から残る鷲の門を生かす必要があったし、建物は滴翠閣がすでに存在していた。さらに、日比谷公園では設計を専門家にまかせた日本庭園はすでに存在しており、池についても日本庭園内の池と弁天池があったため、新たにこしらえる必要はなかった。また、日比谷公園を特徴づける音楽台は徳島公園に設けられなかった。

公園の形状も異なる。面積は日比谷公園が16万2千 $m^2$ 、徳島公園は開園時の面積が18万5千 $m^2$ であり数字上は似ているが、日比谷公園がほぼ長方形であるのに対して徳島公園は三角形に近く、また中央部には鬱蒼とした森で覆われた城山が聳えている。二つの公園の最も大きな違いは、この城山の存在とあって良いだろう。本多は林学者であり、森林の価値を充分に知っていたため、城山にあまり手をつけることはしなかった。よって面積は徳島公園の方がすこし広いが、人が利用できるスペースは格段に狭

く、さらには城山が中央にあるためにそれ以外の区域が分断され、景観が遮られている。しかし、このことは逆に、先にも述べたように各区域の特徴を際立たせることにも繋がっている。

次に二つの公園の類似点を以下に挙げる。

#### (1) 幅が広く、曲がった道

日比谷公園の大道路は、前述のように本多がフリーハンドで描いた。馬車の往来を可能にするため6間幅（約11 m）の大きなものである。田中（1974）は『日本の公園』の中で「日比谷公園に明るさと近代性を与えたのは、園内をとりまく大きな道路である。」と評している。徳島公園でも幅2間（3.6 m）以上の道路を設けているが、『写真集 徳島100年』（徳島新聞社1980）に収められている初期の徳島公園の写真を見ると日比谷公園には及ばないが、実際は2間よりかなり広かったと思われる。日比谷公園の道幅と比べて狭く設定されたのは、徳島公園は中央に城山があり、その他の空間を有効に使うために道の占める面積を抑えるため、あるいは馬車利用の必要性の違いを考慮したためであろう。また、園路の配置は曲線を多用して直線が少ないことも二つの公園に共通している。

#### (2) 運動場やグラウンド

田中（1974）は『日本の公園』の中で、公園の中に運動場が作られるようになったことを指摘し、その理由について明治に入ってから学校の運動会が開催されるようになったことや祝賀会・歓迎会を開く機会が多くなったこと、自転車が普及して各地で自転車競争が行なわれるようになったことを挙げている。

徳島公園に西の丸運動場ができたのは昭和4年（1929）であり、それ以前は一面広い原っぱであったが、一般に開放されて様々な行事に使用されていた。河野（1982）によれば明治41年（1908）の軍隊歓迎式をはじめ、消防出初式、市内や全県の小学校の連合運動会、自転車やオートバイの競争大会、大相撲の地方巡業、著名人の葬儀などが催されていた。

#### (3) 花壇・植物園

日比谷公園の花壇について田中（1974）は、「花壇は今まで宮廷や富豪だけが私園で楽しんでいただけでなかったものを一般化したものであって、西洋

草花の集団美に人気が集まった。」「日比谷公園の花壇は世界的にいても、それほど遅いものではなかった。」と記している。徳島公園の植物園は、現在バラ園のある所に当初から植物園として設計されていた。

公園に植物をたくさん植えることについて、本多は東京市会で「夜間に花や木を盗まれてしまう」と攻撃されたが、「公園の花弁をぬすまれないくらいに国民の公德が進まねば日本は亡国だ。公園はその公德心を養う教育機関の一つになるのだ。」「私は公園にたくさんの花弁を植えて、国民が花に飽きて盗む気が起きないくらいにするのだ」と答弁したと自伝で述べている（本多2006）。

また、設計段階では盛り込まれていなかった設備・施設で、開園時あるいはその後整備されたものについて共通点を以下に挙げる。

#### (4) 図書館

日比谷公園の明治40年（1907）の園内地図（図3）には南端に「東京図書館敷地」があるが、これは翌年に開館した東京市立日比谷図書館の建設予定地であり、本多・本郷による当初の設計にはなかったものである<sup>15)</sup>。徳島公園の光慶図書館が建設されたのは大正5年（1916）であるが、前述のように設計前から園内に図書館を設置することは予定されていた。

#### (5) 噴水

日比谷公園の二つの池にはそれぞれ「鶴ノ噴水」と「雁ノ噴水」が設けられた。徳島公園の設計図には、旧表御殿庭園にある池と弁天池の二つの池があるが、噴水は設けられなかった。ともに藩政時代から残る池であり、手を加えることを避けたのだろう。徳島公園の噴水は、大正6年（1917）に建てられた蜂須賀正勝公の像の前に作られた。昭和初期の鳥瞰図には蜂須賀正勝公の像とその前の噴水が描かれている（図2b、c）。

#### (6) 飲食店

日比谷公園では開園と同年に洋風喫茶店松本楼、和風喫茶店三橋亭（現パークセンター）、結婚式場高柳亭（現日比谷パレス）、洋風レストラン麒麟亭（現レストランなんぶ）、植木屋などが出店し、現在もある店舗の多くが出揃っている。松本楼と三橋

亭は明治40年(1907)の地図(図3)にも掲載されている。徳島公園は、本多の設計図に二つの喫茶店が描かれている(図1)。昭和12年(1937)の「大徳島市勢大観」には、公園内の飲食店として太陽軒と第二喜楽が描かれている(図2c)。

以上6項目を挙げたが、これらの共通点はこの二つの公園にとどまらず、その後の日本の公園に取り入れられていった。

### 3. 徳島公園とザイファースドルフ城の共通点

前述のように本多は日比谷公園の設計にあたり造園家マックス・ベルトラムの『造園設計図案』から3枚の図を取り入れている。そこで、徳島公園の設計に際してもこれを参考に行っている可能性があると考え、『造園設計図案』に収められている図案から徳島公園と類似するものがあるか探した。同書には46枚の図が収められているが、そのうちXXXII番の“Die Parkanlagen des Herrn Graf Brühl zu Seifersdorf bei Radeberg”と題された図(図4a)が徳島公園と類似していることが分かった。この図はドイツのザクセン州ラーデベルク近くのザイファースドルフ(Seifersdorf)にある13世紀に作られたBrühl伯爵の城である。19世紀の始めに改築され現在に至っている。図では改築前の状態が点線で示されている。敷地全体は歪んだ平行四辺形をしており、城の入口や、橋を渡って庭に続く道は、敷地の歪みに合わせるように少しずつ角度がつけられている。本書付属の解説書には、敷地の形に合わせて建物を設計するのは難しかったに違いないと記されている。

これと類似がみとめられたのは、徳島公園の城山南側の南区の部分である。図4b、cに両者のトレース図を並べて示す。類似点は次の通りである。

(1) 両者に形の似た堀が存在する。

(2) ザイファースドルフ城では、城と庭が堀に架かる橋で結ばれており、橋を渡った所は庭を通る道が集中する重要なスポットになっている。徳島公園においても、堀に架かる下乗橋は城の入口である大手口と繋っている。大手口は、武具櫓跡や太鼓櫓跡の石垣が聳え城の面影を色濃く残す現在でも重要なスポ

ットである。

(3) 徳島公園に円形に閉じた幅2間の道があり、その円が内側のY字状に細い道によって3つに分割されている。ザイファースドルフ城においても図の上部にY字状の道で区分された箇所が存在する。

この形状の道路を本多は気に入ったのか、昭和4年(1929)の前橋市の敷島公園の設計にも採用されており(本多ら1929)、そこではより正確な円とY字になっているが、この部分はその後の改良でなくなってしまった(塚田ら2009)。

徳島公園においても平成4年(1992)に千秋閣跡に徳島城博物館が建てられた際に、その前の道の様子も変わり、ザイファースドルフ城と共通していたY字形の道はなくなってしまった。

(4) 徳島公園の図において記念館・商品陳列館の正面の道が複雑な形をしているが、ザイファースドルフ城においても城の下に描かれている庭園が幾何学的な構造をしている。また、両者においてこの部分は、堀を左側に迂回する道で繋がっている。

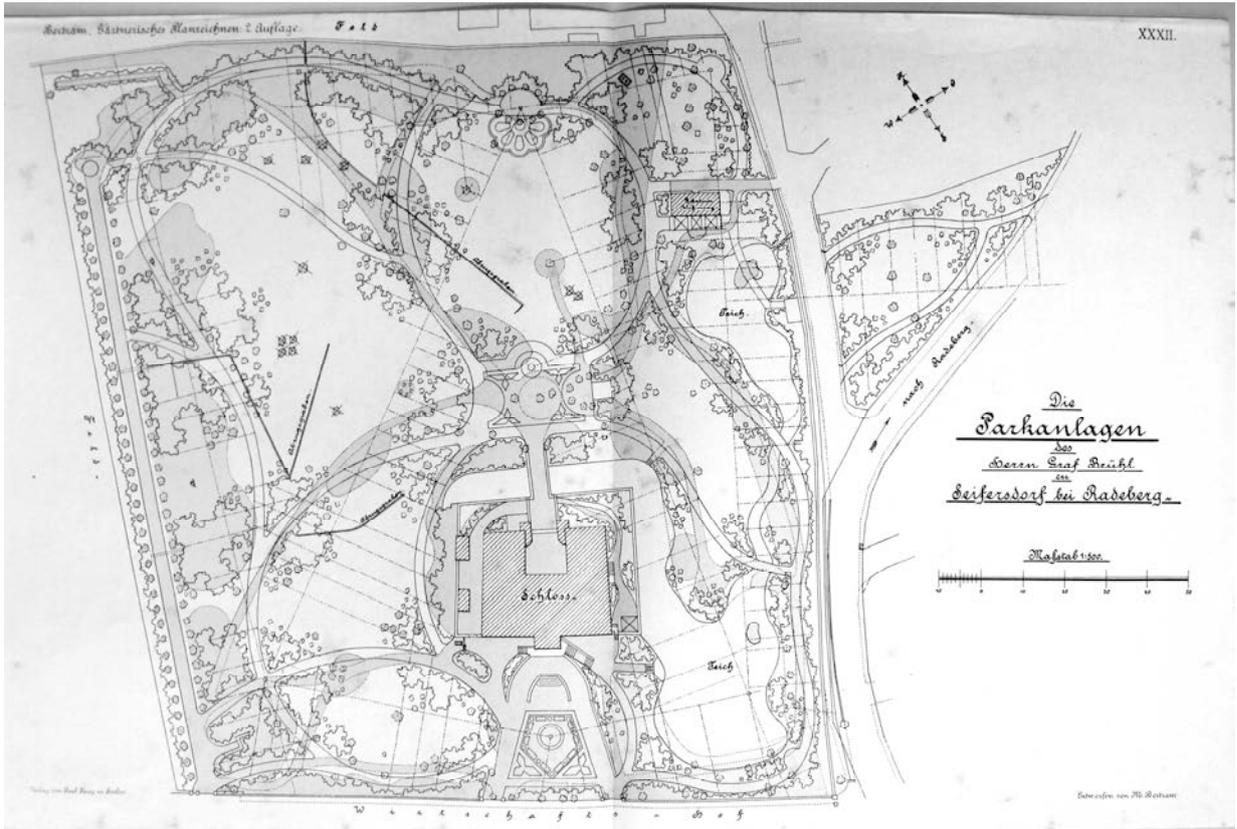
『造園設計図案』の中で、徳島公園と類似性の高い図はザイファースドルフ城の他に見つからなかった。本多や本郷がこの図を参考にしたという証拠は見つかっていないが、参考にしたと仮定してザイファースドルフ城を選んだ理由は何だろうか。徳島公園は城趾公園であるが、『造園設計図案』の中で城(城趾)はこのザイファースドルフ城のみであり、また堀が存在するのもこれだけである。城趾であることや堀の配置の類似性に気づいた本多・本郷が、園内路の配置について参考にしたとしても不思議ではない。

現在のザイファースドルフ城は地元のコミュニティが所有しており、図書館や消防などが入っている。

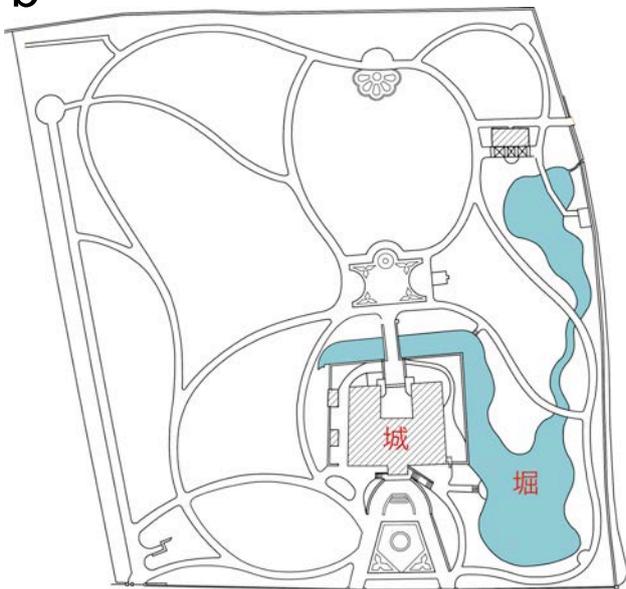
### 終わりに

本研究は、明治38年(1905)の公園設計図から読み取れる徳島公園の特徴や設計の理念を分析するとともに、公園内の主要な施設が造られた昭和初期までの歴史をまとめたものである。現在の徳島中央公

a



b



c

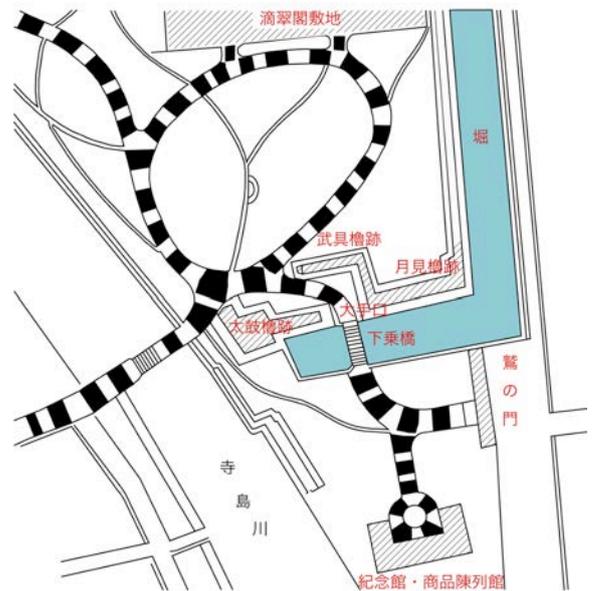


図4 ザイファースドルフ城 (Schloss Seifersdorf) と徳島公園の比較

a) マックス・ベルトラムの『造園設計図案』に収められたザイファースドルフ城の図、b) a) 図から改築前の道や樹木を除いたトレース図、c) 本多・本郷による徳島公園の設計図から城山南側のトレース図。

園についても簡単に補足しておく、面積は20万 $m^2$ であり、設立時よりも広くなったが、それは徳島刑務所（監獄署）が昭和46年に移転して敷地が公園の一部となり、そこに徳島市立体育館が建ったことや、市制100年を機に開始した助任川河岸緑地整備事業により助任川の対岸まで公園区域として拡張されたためである。本多と本郷が設定した5つの区についても変更され、現在は城山ゾーン、旧徳島公園ゾーン、スポーツゾーン、休養ゾーン、河岸ゾーンの5つに区分されている。公園内の旧徳島城表御殿庭園は昭和26年（1941）に国の名勝に指定された。また、平成18年（2006）には、徳島城跡が国の史跡に指定されるとともに日本100名城の第76に選定された。

徳島公園は開設以降幾多の変遷を経つつも常に市民の憩いの場として、また様々なイベントの開催会場として親しまれてきたが、開設当初にこの公園がどう評価されたのか分かる資料を次に紹介する。

石毛賢之助による『阿波名勝案内』は明治41年（1908）に刊行された徳島県の歴史や名所旧跡神社仏閣などを記載した本であるが、同書の最初に取りあげられているのが、開設して間もない徳島公園である（石毛1908）。そこには「其位置殆んど市の中央に位し而も海拔二百尺の獨立山丘を有するは全國他に其類例を見ず天然の形勝を占め得たる点につきは正に日本の公園中第一位に推さるべきものたり<sup>16)</sup>、二に幽邃蔚葱たる天然の森林を有し、三に山水の勝を併せ得て其眺望絶佳なり是れ徳島公園の三特色たり」と賛美している。石毛が挙げた三つの特色を言い換えると、一つ目は市の中心部に位置するにもかかわらず山を取り囲む珍しい立地の公園であること、二つ目は城山の天然林を保存していること、三つ目は城山から臨む眺望が素晴らしいということであり、要するに三つとも城山に関わる内容である。このように城山の重要性が強調されているのは、公園を設計した林学者本多の言に依っている。明治38年（1905）11月7日の徳島毎日新聞の記事には、本多の言葉として、「徳島公園は公園としての資質を備ふる点に於て蓋し日本の各公園中第一位」と記されている。その理由として三つ挙げられていて、内容は石毛が記したものとほぼ同じである<sup>17)</sup>。

本多は「日本公園の父」とも呼ばれ、都市公園から森林公園にいたるまで、日本各地の主要な公園の設計を手がけ、その数は数百になる（本多静六博士

顕彰事業実行委員会2002、2004）。公園設計に対する本多の考え方がうかがわれる例として大正9年

（1920）に水戸の偕楽園の改良案がある。ここでは、偕楽園を「公園の先駆け、様式斬新、技術上極めて優秀」等と評価する一方、具体的な改良意見として「運動場・記念碑を廃し、旧態に復すこと」など「復旧保全に全力を注ぐべきである」と提言している（本多静六博士顕彰事業実行委員会2002）。すなわち、日比谷公園や徳島公園で評価を得たこととは逆の方向性を打ち出しており、常に同じタイプの公園を作ることを良しとはせず、個々の公園の歴史や状況を考慮して計画を作るべきであるという姿勢がみられる。

徳島公園は日比谷公園に続き本多が設計を手がけた二番目の公園であるが、城山の原生林を残そうとする自然保護思想が見て取れ、ここに日比谷公園とは別の考え方が表れている。本多の功績として公園設計の他に、造林事業、そして日本の巨樹・名木・神木のデータベースである『大日本老樹名木誌』（本多1913）の編集があるが、同書は天然記念物に関する法律制定を念頭に置いて保存すべき樹木をリストアップしたものである（佐藤ら2012）。城山の原生林は、現在市天然記念物および環境省の特定植物群落に指定されており、その保全がはかられている。

以上のように本研究では徳島公園の近代公園史の中での位置づけを試みた。また調査の過程で、ドイツのザイファースドルフ城との類似を見だし、本多・本郷がこれを徳島公園の南区の設計に取り入れた可能性を指摘した。本多は日比谷公園の設計においてドイツの公園の設計を取り入れたことを公言しているが、『造園設計図案』から取り入れた三つの図は丸写しに近いものであった。しかし、徳島公園の場合、ザイファースドルフ城を参考にしたとしてもかなりアレンジしており、あえてそのことを公言する必要を感じなかったのかもしれない。この点については今後の資料の発見が望まれる。

本研究での発見が、徳島中央公園を利用する方々ならびに維持管理する方々にとって、公園に対する理解を深め、一層親しみを抱く助けとなれば幸いである。

## 註

- 1) 徳島公園は昭和52年（1977）に「徳島中央公園」に改称された。本稿では、改称前の公園について言及する場合は「徳島公園」、改称後の公園について言及する場合は「徳島中央公園」と表記する。
- 2) “Gärtnerisches Planzeichnen”は日本では翻訳されていない。同書は『日本の公園』（田中正大、鹿島研究所出版会、1974）では『庭園設計図案』と訳され、『近代都市公園史の研究－欧化の系譜－』（白幡洋三郎、思文閣出版、1995）や『庭園史をあるく－日本・ヨーロッパ編』（武居二郎・尾崎博正・加藤允彦・仲隆裕・佐々木邦博、昭和堂、1998）では『造園設計図案』と訳されている。本論文では後者の『造園設計図案』とした。
- 3) “Gärtnerisches Planzeichnen”は1880年に初版が刊行されて以来、何回か再版されている。本研究では、1880年版である“Gärtnerisches Planzeichnen. 2. Aufl. Pappumschlag mit Leinenrücken mit Schliessbändern”と1909年版である“Gärtnerisches Planzeichnen: Leitfaden für den Unterricht an höheren Gärtnerlehranstalten und Gartenbauschulen und zum Selbstunterricht für Landschaftsgärtner”を参考にした。1880年版はドイツの古書店から購入し、1909年版は九州大学農学部所蔵のものを閲覧した。両者は図版は同じであるが、後者には図版の他にAlbert Kiesslingによる解説冊子が付属している。
- 4) 明治38年5月8日から5月14日にかけて徳島毎日新聞に「戦捷記念事業」という見出しの記事が連載された（国立国会図書館所蔵マイクロ資料）。
- 5) 公園設置趣意書には「涓津城址ヲ公園トシ、涓山ノ頂上ニ招魂社ヲ安置シ、園内に陳列館、図書館ヲ建設シ」と記されてる（河野幸夫著『徳島城の歴史』（徳島市観光課、1980）及び『徳島 城と町まちな歴史』（聚海書林、1982））。
- 6) 売買契約書は徳島県立文書館に所蔵されている（資料名『徳島公園譲渡関係書』、古文書番号「H300098000」）。
- 7) 鷲の門は平成元年（1989）に徳島市制百年を記念して吉井ツルエ氏より復元・寄贈された。
- 8) 本多への設計依頼から着工までの経緯は当時の徳島毎日新聞で報道された（国立国会図書館所蔵のマイクロ資料を参照した）。造園設計の詳細は、本多の談話を基に11月7日から10日にかけて同紙上で発表され、12月5日には同紙上に設計図が掲載された。
- 9) 当時は「記念」を「紀念」と表すことが多かった。
- 10) 滴翠閣は、昭和3年（1928）に徳島市から大日本武徳会に譲与され、公会堂として改築され、名称も「武徳殿」と改められた（河野1980、1982、小川1933）
- 11) 明治42年に徳島實業協会が発行した地図「徳島市街及附近名勝」を参照した（徳島県立文書館所蔵：資料番号：G200530013）。
- 12) 四国大学学附属図書館凌霄文庫所蔵の『徳島県立光慶図書館概要』を参照した。これは光慶図書館の設立経緯、建築様式、経費、蔵書などを記した冊子である。冊子に発行元および発行時期は記されていないが、設立と同時か直後に光慶図書館が作製したものである。
- 13) 『大徳島市勢大観』（1937）は徳島県立文書館の企画展「歴史写真でよみがえる徳島の姿」に展示された写真の画像ファイルを、承諾を得ていただいたものである。
- 14) 徳島県立文書館所蔵の「昭和20年7月5日 米軍撮影徳島市街地航空写真」を参照した。同館には空襲前の昭和20年3月24日に米軍が撮影した航空写真も所蔵しているが、本論文は空襲後の写真を用いた。空襲により樹木も焼け、公園内の状況がより鮮明に分かるためである。
- 15) 東京市立図書館の設立は、明治37年（1904）3月に東京市議会で決議された。日比谷公園内に設立することが決定したのは明治39年（1906）4月であり、同年7月に予算決議された（吉田昭子、「東京市

立日比谷図書館構想と設立経過：論議から開館まで」. Library and Information Science 64, 135-175. (2010).

16) 『阿波名勝案内』は大正5年(1916)に再刊行されたが、その際この部分は「日本の公園中屈指に値すべきものたり」と表現が改められている。「第一位」から「屈指」に遠慮した表現になっているのは、初版から時間が経ち各地で公園が整備されてきたことを配慮したものだろう。

17) 本多が挙げた三つの理由は、石毛より詳しく説明されている。以下に石毛が記していない部分を補足しつつそれを記す。第一点は、市の中心に位置しながら、独立山丘を持つことである。多くの公園が山を得るために場所が市街地から離れざるを得ないが、徳島公園は市の中心部に城山があり、そこを含めて公園とする十分な敷地があったこと、二点目については、城山の天然林を有することで、この林相は10年や20年では形成されないものである。各地の公園が園内に森林を造ろうと汲々としているが、人の力ではどうにもならないことである。第三点は、山水の勝を併せ持つことである。園内に山とその森林を有している上に、助任川、寺島川の水脈に囲まれ、かつ海を臨んでいる。

## 引用文献

石毛賢之助. 『阿波名勝案内』. 黒崎書房.(1908).  
 上田直. 『徳島城の研究 附 徳島公園の沿革及案内 阿波統治の沿革概要』(1924). 本冊子は歩兵第十旅団副官上田直が、徳島公園において師団の演習の分別式が催されるのを機に、編集し配布したものである。四国大学附属図書館凌霄文庫所蔵。  
 小川袖香. 『眉山案内 附 徳島公園』. 小川國太郎(1930). 本論文では昭和8年(1933)に発行された再版を参照した。  
 熊谷洋一・下村彰男・小野良平. 「マルチオピニオンリーダー 本多静六 日比谷公園の設計から風景の開放へ」. ランドスケープ研究 58, 349-352 (1995).  
 河野幸夫. 『徳島城の歴史』. 徳島市観光課.(1980).  
 河野幸夫. 『徳島 城と町まちの歴史』. 聚海書林.(1982).

佐藤征弥・阿部梨沙・乃村亜由美・姜憲・瀬田勝哉. 「日本と朝鮮半島の巨樹 - 樹種および巨樹にまつわる伝承の比較」. 植生史研究 21, 3-19. (2012).  
 白幡洋三郎. 『近代都市公園史の研究 - 欧化の系譜 -』. 思文閣出版.(1995).

進士五十八. 『日比谷公園 - 100年の矜持に学ぶ』. 鹿島出版会.(2011).

武居二郎・尾崎博正・加藤允彦・仲隆裕・佐々木邦博『庭園史をあるく - 日本・ヨーロッパ編』. 昭和堂.(1998).

田中正大. 『日本の公園』. 鹿島研究所出版会.(1974).  
 塚田伸也・森田哲夫・湯沢昭. 「利用と空間構成の移り変わりから捉えた敷島公園設計案の評価に関する基礎的考察」. ランドスケープ研究 72, 849-854. (2009).

東京市史編纂係編. 「東京案内」裳華房.(1907). (本研究では国立国会図書館近代デジタルライブラリー 電子展示会「写真の中の明治・大正」から日比谷公園の平面図(YDM202555)を用いた.)  
 徳島新聞社編集発行. 『写真集 徳島100年』.(1980).  
 本多静六編. 『大日本老樹名木誌』. 大日本山林会.(1913).

本多静六. 『本多静六自伝 体験八十五年』. 実業之日本社.(2006). (本書は、昭和27年(1952)に大日雄辨会講談社より刊行された本多静六著『本多静六体験八十五年』を改題・再編集したものである。)

本多静六博士顕彰事業実行委員会編集・発行. 『日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』.(2002).

本多静六博士顕彰事業実行委員会編集・発行. 『日本の公園の父 本多静六』.(2004).

本多静六・井上清・柳生績. 「敷島公園改良設計案」. 日本庭園協会調査部.(1929).

前島康彦. 『日比谷公園』. 郷学舎.(1980).

丸山宏. 「近代日本公園史の研究」. ランドスケープ研究 61, 62-67. (1997).

山口智. 「日比谷公園の成立」. Urban Study 38, 1-9. (2004)

吉田初三郎. 「とくしま」. 観光社関西支社.(1931). (四国大学附属図書館凌霄文庫所蔵)

論文受付：2012年8月28日  
 論文受理：2012年9月22日